

私は日本でこうして生きてきた 朴 愛玉

昭和 15 年(1940 年) 私たち一家は朝鮮慶尚北海の故郷から日本にやってきた。

朝鮮では百姓をやっていた。しかし、月のうち 15 日は勤労働員に出なければならなかった。また芝を供出し、とよく指示があった。そのたびに、夫はあてどなく芝さがしに歩きまわったものである。

米をつくと重い供出で、家で食べる米は一粒も残らなかった。税金も重かった。

なにやかやと重なって、朝鮮ではどうしても食えなくなった。同じ苦労をするのなら、日本へ行って苦労をしようということになり、からだ一つで日本に来た。

日本へきてからは、山口県の小野田炭鉱で働いた。労働ははげしかった。夫が体を悪くしたので広島へきた。そこでもひどい暮らしが続いて、戦争の終りの頃、私たち一家は“きび”を食べて暮らした。箒をつくる材料の“きび”である。

7 月 31 日に、4 人目の子どもが生れ、8 月 6 日に原子爆弾が落ちた。当時わが家は、牛田町の山すその坂道にあった。

家は爆風のためガラスはこわれ、くずれてしまって住めなくなった。

その頃私たち一家の外に、18 才の甥がいっしょに住んでいた。甥は常盤橋で被爆して足を折り。全身火傷をしてはうようにして家に帰って来た。長女はガラスの破片で傷だらけになった。

産後の私はどうしようもなく、夫は牛田山の兵舎のこわれた材木を運んで、バラックを大急ぎでこしらえた。

甥は十日ばかりで死んでしまった。かわいそうでならなかったが、仕方なくそのまま牛田山に埋めてやった。

幸い私たちの子どもはどうやら元気になり、まあまあということだったが、食べさせることが大変だった。

砂糖の配給があれば、そのまま売ってしまった。仕事がしたくても朝鮮人はやとってくれない。仕方がなくてヤミ米運びで生活をした。農家へ米を買いにいても、日本人の値段では売ってくれないので、高い値段で買ってこなければならず、ヒビの飯ばかり食べてくらしした。

その頃、一番辛かったのは「朝鮮人は朝鮮に帰れ」「朝鮮で日本人は終戦のとき半殺しの目にあった」というような言葉を聞くことだった。

原爆で被爆した友人の多くは、終戦になって故国朝鮮に帰っていった。

考えてみると、被爆前も後も、私たち朝鮮人の暮らしは殆んど変らなかったように思う。

昭和 26 年(1951 年)私たち夫婦は揃って失対(失業対策事業)にでて働くようになった。

朝鮮人だから賃金は最低で、差別されながら生きてきた。今は、相生通りに住んでいるが、ここには朝鮮人が 300 世帯住んでいる。

子どもたちは大きくなり、それぞれ独立している。被爆当時の苦しさ程ではないが、今も決して生活は楽ではない。

(1964 年第 1 集より)